

従軍と抑留

町村 永治（大正 14 年生まれ）

私は昭和 18 年 2 月、舞鶴海兵団に現役兵として入団。三か月の基礎訓練を受け、砲術学校に入校、卒業、海上艦隊に配乗。所属艦隊は第 2 水雷戦隊第 31 駆逐隊で、同僚艦は四隻で新鋭の艦で、速力も早く兵装も良い艦でした。私はこの駆逐艦で捷一号作戦に参加「レイテ沖海戦」昭和 19 年 10 月 24 日～25 日の作戦で戦艦大和を先頭に内地部隊、外洋部隊、航空部隊、全海軍参加の大作戦でしたが、日本艦隊は大損害を受けて再建不能になってしまいました。私の乗艦「沖波」は昭和 19 年 11 月 13 日、ルソン島マニラ港で米軍艦載機の攻撃を受けて海没、私は助かり次の勤務に付きました。

今度の乗艦は 2 等輸送艦第 140 号でした。S B 型の輸送艦で、この輸送艦は戦時急造艦でしたので、不良の箇所が多くあり、乗組員の苦勞の種でした。輸送艦は戦闘艦ではなく兵員、兵器、弾薬、食料等を積み込み、敵前でも強行揚陸するのが任務ですから、私はこの艦で第 7 次、第 9 次輸送作戦で米軍の陣地の銃眼の前で強行揚陸作戦に参加、九死に一生を得ました。140 号輸送艦は昭和 20 年 1 月 4 日、ルソン島マニラ港を脱出、当時のフランス領印度支那半島サイゴン市、現ベトナム半島ホミンチ市入港、同年 1 月 12 日、米軍艦載機の直撃弾三発を受けて大破、炎上、海没してしまいました。

数日後、私達乗員 30 名は大嶋甲板士官指揮下に印度支那航空隊ツドモ基地で防空と陸上警戒の任務につかされ、25 ミリ 2 連装機銃を二機装備して陣地構築、隊名は海軍第 11 特別根拠地隊第 10 警備隊大嶋小隊でした。私はこれで海とのお別れで一安心しました。この地では、20 年 3 月 10 日の「明」号作戦に参加しただけで、一発の弾丸も撃たず作戦は終わりました。この作戦はフランス植民地軍を日本軍が武装解除して軍事施設を占領下に入れる軍事行動でした。陣地の警戒任務はのんびりとして不自由もなく、食生活も良く、私達だけでの生活ですので、軍規もゆるく他の南方地域よりは大変住み易い所でした。私はこの陣地でアヒルを数羽飼い、タマゴをとりました。また、この日本軍航空基地には米軍の攻撃も無かったのです。

昭和 20 年 8 月 15 日、日本帝国は連合軍の無条件降伏を受諾して戦いは終わりました。私達佛印駐留の陸海軍人は、20 年 10 月 10 日頃に連合軍の武装解除を受けて大嶋隊は解体され、作業隊に編成されて連合軍の指揮下に入り、半袖半ズボンの軽装になり、きびしい暑さの中で毎日の重労働が始まりました。サイゴン港よりの軍需品が多く、荷揚、運搬、積み込み、基地建設の資材等で、大変な量でした。サイゴン港にはドイツ兵の捕虜も同じ作業でした。連合軍はドイツ兵には厳しい態度でした。連合軍には米軍がおらず英軍でインド兵、グルカ兵が多く、私たちは親しみやすかったと思いました。私はこの作業中にマラリアを 2 度発病してインド軍医より治療を受けて帰り、日本軍の病院に入りましたが、病院とは名ばかりでニッパ小屋の地面に麻袋を敷き、上かけなど無く、ゴ口寝で 37、8 度の高熱で苦しみ、マラリアの薬など日本軍には無く、手当てなど出来なかったのです。私はこの地で人生も終わり、異国の土となるのかと覚悟しましたが、

私の入院中に「ミト」作戦と呼ばれる作戦があり、旧大嶋隊よりも数名参加しました。この作戦は安南^{あんなん}の独立運動の手伝い作戦で連合軍の命令で日本海軍の兵士が参加し、戦死2名重傷1名の犠牲^{ぎせい}を出しましたが、安南独立運動のウラ話になり、独立運動にはどんな国でも犠牲者が出るのですが、現在ならば国際問題になりますが、日本人犠牲者は泣き寝入りになってしまいました。

当時ベトナム半島は佛印と一般に呼ばれており、また安南とも言われ、今次大戦によりフランスより独立してバイタイ大帝の統治下にあり、大変な親日国で食糧も豊かで住み良い国でした。21年頃になると収容所を数名で抜け出して、安南人の住宅に行き、現地酒を飲んで収容所に帰ってくるようになり、安南語も少し判り、また監視の印度兵^{いんど}、グルカ兵とも仲良くなり、身振り手振りで話が通じるようになり、お互いの国の話が出来るようになり、一日も早く故国に帰り親、兄弟に会い、戦いの無い生活を送り、平和に暮らし、人生を送りたいなどとも語りあえるようになりました。

私は病院退院後、ゴム倉庫（連合軍占領）の警戒に出してもらい、連合軍貸与^{たいよ}のカービン小銃でゴム林の奥深く入り、野生の鶏を撃ちに戦友数名と入り一度も獲物が無くがっかりでしたが、また付近に駐屯の陸軍部隊と合同で演芸会を開き、抑留中の憂^うさをはらしていました。

一事故がありました。南方方面は毎日大きなスコールが夕頃にあり、大木の下で番兵に立哨中^{りっしょう}に雷に当たり死亡した事故でした。約二か月後には内地に帰れたのに大変残念でした。

この頃になると内地^{ないち}の様子もわかり、ボツボツと復員船^{ふくいんせん}の話が出るようになり噂が出始め、4月初旬に復員船の第一船がサイゴン港に入港し、復員者は沖縄、樺太（サハリン）の戦友で、次は炭鉱で働く者、復員船に乗るもので、また病院船で帰る者で、私達現役兵は最後に残り、復員待機所に入り、復員船「初鷹^{はつたか}」（旧日本軍軍艦）を待ち、私は入港日時がわかった時に大嶋隊員の入院患者を見舞いに行き、別れをおしんできました。「初鷹」には砲術学校の同期生、同年兵が数名乗船しており、元気な姿を見て無事を喜びあいました。南方の異国で会えるとは誰も思わぬことでした。佛印方面の海軍司令長官の見送りを受けてサイゴン港を出て、日本国を目指し進み21年5月23日広島県の大竹港^{おおたけ}に入港、旧海兵団に1泊、戦友達と最後の夜を過ごし、鉄道切符を渡され、少々の荷物をリュックに入れて、各員別れを惜しみ郷里に向かいました。

やっと自由に人間らしく行動できるようになった訳です。ツドモ基地では、大嶋隊長の指揮下1名の事故者も無く、30名無事に内地の土を踏むことが出来たのは、大変幸運だったと思っております。